舟橋聖一

お七花体

講談社版

お七花体

昭和三十九年十月三十日　第一刷発行

著　者　舟橋聖一

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九

電　話　東京(942)一一一一（大代表）

振　替　東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

定　価　六五〇円

© 舟橋聖一　一九六四

目次

非常太鼓　七
この美しきもの　一三
寺小姓　一九
春影　二五
浪曼的　三一
愛と秘密　三七
白山吹　四三
ほつれ髪　四九
砂糖餅　五五
蕎麦切　六一
準女犯　六七
町景色　七三
恋やつれ　七九
井守酒　八五
女お小姓　九一

慈眼　九七
多妻多妾　一〇三
淡墨色　一〇九
ほたる籠　一一五
浅い夢　一二一
菊野風呂　一二七
天水桶　一三三
かどわかし　一三九
八重むぐら　一四五
ささやき　一五一
茗荷谷　一五九
二人吉三　一六三
踏絵　一六九
豺狼　一七五
猿ぐつわ　一八一
二人おかん　一八七
川音　一九三

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

残照　一九九
浮世草子　二〇五
甘い客　二一一
阿鼻の声　二一七
本所小梅　二二三
白浪　二二九
女番頭　二三五
失踪　二四一
ニセ甲比丹　二四七
紅筆　二五三
寂円寺裏　二五九
痺れ薬　二六五
平打簪　二七一
極限　二七七
稲荷新道　二八三
濃化粧　二八九
紅椿　二九五

蛞蝓　三〇一
男疲れ　三〇七
生き形見　三一三
色即是空　三一九
突風　三二五
大罪　三三一
火の海　三三七
つみとが　三四三
容疑　三四九
捕縄　三五五
鮫小紋　三六〇
女牢　三六六
黒い鳶　三七二
判決まで　三七八
昇天　三八四

お七花体

装幀●堀　文子

非常太鼓

一

円乗寺の庫裏の一間へ避難したお七は、ここなら、あのおぞましい摺半鐘の音もきこえないので、漸く胸さわぎが静まった。

といっても、自分の家に火の粉が降るようになってから、あわてて、着のみ着のままで逃げてきたわけではない。その当時の江戸は、

「火事――」

ときくと、遠い近いにかかわらず、すぐ逃支度をするほど、神経過敏になっていた。それは度重なる大火の悲劇に、みな怖毛をふるい、殊に本郷丸山の本妙寺から出た明暦の振袖火事で、何万という大ぜいの死者を出したところから、火事ほど恐ろしいものはなかったのである。

お七の父久兵衛。またの名を太郎兵衛とも云うが、もとは加賀前田家の近習で、山瀬三郎兵衛と云った男だ。仔細あって、前田家から暇をとり、本郷追分町に店を出して、八百屋渡世をしていたが、それは表向きで、実は内密に、前田家から金が来ていたから、生活は至って楽で、一人娘のお七には、贅沢のさせ放題であった。

その上、久兵衛は先の見える用心深い男だから、いざ火事の場合は、どこそこへ避難するように、あらかじめ、避難所を約束しておいた。それが、駒込の円乗寺だ。

久兵衛はそこの住職乗詮和尚に、

「二度と、振袖火事のような大火があっちゃァ困りますが、然しまァ、ないとも云えない。若し、大きな火事があるようでしたら、いち早く女房娘を、お寺へ避難させますから、どうぞよろしゅうお願いしますよ」

と、頼みこんでおいた。円乗寺にとっては、大事な檀家のことだから、

「そりゃお安い御用だが、そんな大火事が、度々あっちゃァたまりません。然し、火は早いところ逃げるに限る。振袖火事で死んだのも、財産に未練があって、逃げおくれた者が、不幸な目にあった。まだ隣りやご近所が逃げ出さないうちに、早くお寄越しになることです」

「全く以て、仰せの通り。大きな荷物を背負って逃げ廻っているうちに、その荷物に火がついて、死んだ者が多いそうですよ」

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」
「何分気ままに育った娘のことですから、お寺へ行っても、わが家にいるようなつもりで、勝手を申しましょうが、どうぞお気にさえられずに……」
「そこはお隣りの吉祥寺のような格式の高い寺と違って、気のおけないのが、何よりの取柄でしょう。遠慮なしに、いつでもおいで下さいよ」
と、乗詮和尚は如才ない。久兵衛と和尚の間に、前以てそういう約束がしてあったので、
「火事だァッ」
と聞くなり、お七は母のお丈と一緒に、荷車に乗せられて、下男久八が挽き、小僧梅吉があと押しして、駒込の円乗寺まで、まだ人混みのないうちに、楽々と避難することが出来たのである。
が、さて自分の身体は安全になったものの、八百屋の店が、焼けるか助かるかは、わからない。刺子を着た父久兵衛は、番頭二人を伴って、旧主前田家の防火に馳せ参じたし、あとに残って店を守るのは、手代の長四郎、下女お杉その他四、五人である。
「こっちは、これで安心だから、さァ久八も梅吉も、すぐまたお店へ、取って返しておくれ」
母のお丈とても気が気でない。
「へい。かしこまりました」
久八はカラになった荷車を挽いて、再び走った。
すでに本郷から小石川一帯の空は、まっ赤に彩られて、ときどき火柱の立つのが見えた。

二

お丈は髪に冠ったお七の手拭を取って、
「お七、どこも何んともありませんか」
「はい——どこも」
「それはよかったね。こうして無事でいられるのも、父さんがこちらのお上人様と、かねてこの部屋のお約束をしてあったおかげ——何ごとも、一手先にうってお置きになる父さんなればこそ、このような仕合せにもありつける。ありがたいことじゃ」
「でも、たった一間で、暮すんでしょうか」
「まァそんな贅沢な……ほかの部屋は、みんな三世帯五世帯と、雑魚暮しをせねばならぬそうな」
「おお、いやらし。近所の人達と雑魚暮しでは、夜もおちおち眠れませぬ」
「それにくらべたら、一間貸切は、お大名じゃないか」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

「ほんと――」
お七は物珍らしいのか、黒の塗戸の障子のはまった書院風の床のある庫裏の一間を見廻している。
そこへ、乗詮和尚がはいってきた。
「これはこれは、八百屋久兵衛殿の御内方か……はじめて御意得ます」
「和尚様。とんだことで、お世話になります」
「こちらが、お嬢さんか」
「はい。お七という不束者、よろしゅうお願い申します」
「久兵衛殿が可愛いくて、目の中へ入れても痛くないほどの愛むすめ……なるほど、そうもござらッしゃろ。ここなら、いかな火事にも類焼の心配はありませぬ。おちついておいでなされ」
「ありがとうございます」
「それにしても、早いおつきで驚いた。半鐘が、ジャンと云うか云わぬうち、まだ火の手もあがらぬに、お支度召されたのじゃろうな」
「火事だけは、フルフル恐ろしゅうございますからね」
「何に、用心に如くものはござらぬて」
「今夜の火もとは、どこでございましょう」
「妙なもので、また丸山の本妙寺の前から出た――」
「すりゃ、振袖火事と同じ火もとから」
「それ故、かの明暦の大火の二の舞になりはせぬかと、案じられる」
「また大ぜい、死人が出なければ、よろしいのに――」
お七は黙って母に寄添って、和尚の話を聴いている。
突然、ドン、ドン、ドンと、太鼓の鳴る音がした。和尚は立上って、欄間の下の覗き窓をあけて、耳を傾ける。
「何んの音でございます」
「太鼓の非常打鳴しじゃ。さっきまでは、静まり返っていたお隣りの吉祥寺でも、非常太鼓をば、打出しましたな――何に、心配することはござらぬ――」
「火の手はどうでございます」
和尚は遠くの空を仰いで、
「大分、北西へひろがりましたかな……万一のため、境内を一廻りいたして参ろう」
「長四郎やお杉たちも、早く逃げてくれればいいのに」
するうちにも、隣りの寺、吉祥寺の太鼓が、段々に高く鳴りひびく。若いお七は、その音にも怯え怖れて、お丈の手を堅く握りしめずにはいられなかった。

三

「母さま。あの太鼓の音をきいては、せっかく静まった胸うちが、また波立ってしまいます。やめてもらうわけにはいきませんか」
お七は不満そうだ。が、そうはいかない。お丈は首をふって、
「そんな気儘を云ってはなりません。ここは自分の家ではないし、それにあの太鼓は、当寺の太鼓じゃのうて、お隣りの吉祥寺の太鼓だそうだから——」
「吉祥寺のほうが、大きいお寺ですか」
「そりゃもう、十倍も二十倍も大きい。それだけに、お坊様の人数も多いことじゃ。格式の高いお寺様じゃほどに、町人などは、本堂の下で、お念仏を唱えるだけ、庫裏などには近寄れもしない。況して、女はな——」
「女はどうして成りませぬ」
「吉祥寺ともなれば、戒律も至ってきびしく、女人禁制の聖地と云われます。酒も女も、山門に入ることは出来ません。昔からのきつい掟じゃほどに——」
「女なんて、あわれなものね」
「仏さまがごらんになると、女はきっと、汚れが多いのでしょう」
「女に生れて来なければよかったのに。女はつまらない。遊ぶのだって、毬つきかままごとしかないけれど、男の子は相撲をとったり、木登りしたり、大地をかけ廻って遊べるじゃありませんか」
「そんなこと云ったって、女の子に生れた以上は、仕方がないよ。何しろ、お前は夫婦に子供が出来ないので、谷中感応寺の七面大明神様に願をかけて、やっと儲けた子宝なのだから」
「そのお話なら、何遍も聞いて、耳に胼胝が出来ましたよ。それで、七面様の七をとって、お七と名附けたと云うんでしょう」
「明神様の申し子だよ」
「そんなことがあるもんですか。願さえかければ、思うままに子が出来るのなら、いっそ男の子にしてもらえばよろしかったでしょうに——」
「まさか」
「そうは自由になりませんの」
と、お七は皮肉を飛ばした。そのことで毎年、谷中のお寺に、大枚のものを、寄進させられる習慣がこの十六年になるまで、つづいている。それがお七の腑に落ちないのだった。太鼓はまだつづいている。ドン　ドン　ドン
「うるさいなァ」

と、お七は耳を塞いだ。女は山門に入るを許さず、町人は本堂の下でお参りするだけだというような不合理な禁断の世界に、お七は興味も関心も持てなかった。

「そこへ行くと、円乗寺はこうしてあたしたちを温く迎えて下さるんですものね。心からありがたいわ。仏様の思召しは、きっとこれが本当なんでしょう」

「円満具足のいい和尚さまでしょう」

「あたし、吉祥寺なんてきらいよ。格式ばっかりいうお寺なんて、親しめないわ」

町人には、町人のためのお寺が必要であり、円乗寺などがそれなのだろうと、お七は思った。

漸く隣りの太鼓が鳴りやんだ。お七は両手を耳から放した。

「七十九、打ちましたよ」

「数えていたの」

母と子は、火事のこともうち忘れて、笑い興じた。

四

四ツ（午後十時）すぎになって、お杉が梅吉の案内で、円乗寺へ辿りついた。お丈とお七の顔を見るなり、わッと泣きくずれた。

「とうとう、お店にも――」

「火が廻ったの」

と、お七はお杉を抱きおこした。散々火の粉を浴びたお杉は、着物もすす煙りに汚され、顔や手には、黒いものがついていた。

「お倉が焼け落ちるのを見とどけて、私だけこちらへ参りましたが、長さんや久八どんは、旦那様の御様子を見に、加賀様へ向いました」

「それじゃァもう、八百久の店も、すっかり灰になってしまったのね」

「申訳ございません」

「これだけの火事だもの、一人や二人で、防ぎ切れるわけもないよ。それよりお杉、顔でも洗っておいでなさいよ」

「はい。ありがとうございます」

が、亢奮のさめやらぬお杉は、本郷丸山から出た火が、一つは御茶の水から神田台へ流れおち、一つは本郷通りを一舐めして、白山から扇なりに小石川を焼きくずして、今は松平讃岐守様の屋敷へ飛火したところ、と物語る――。

「父さんは大丈夫かしら」

お七は心配になった。元は武士の出とは云え、もう長い間、町人の朝夕であったから、自分は火急のお役に立つ気

でも、身体の無理がきかぬかも知れない。それやこれやで、ひどい怪我でもしたら、取返しのつかぬことになる。義理堅い久兵衛は、まだ旧主のためには、すぐ命を投げ出す気になるらしい。

大名や武士のことは、彼らにまかしておけばいいではないか。町人は自分達で、命と身代を守らなければならない。それなのに、自分の店が焼け落ちるのも知らずに、昔の主人の屋敷へ赴いて、命がけで火消し役に大童とは、バカらしい——。

お杉が庫裏の風呂場で、顔を洗って戻ってきた。

「おかげで、蘇ったようでございますよ」

「それでは、仮りにこの着物でも」

あらかじめ疎開しておいた葛籠の中から、母は八丈の袷と帯をとり出して、お杉に着かえさせた。お杉は座敷の隅へ行き、向う向きになって、焼けこがしのある帯をといて行ったが、少し肩の白い肉を見せただけで、器用に袷に着かえると、腹合せの帯をしめだした。女が見ていても、着ものをぬいだり、着たりするお杉のうしろ姿は、垢ぬけがしていて、色っぽいと思われた。

和尚が重い塗戸をあけたとき、お杉がまだ帯をしめかけていたので、

「これはご免——」

と、当惑しながら、火事の模様を知らせてくれた。駒込は風上だし、火の手が南へ向かっているから、ここは江戸のうちでも、一番安全地帯だということだった。

「それから、吉祥寺では、衆僧会議の結果、大名の御内方に限って、二、三の塔頭へお引受けするが、町人庶民の罹災者は、山門より一歩たりとも入ること叶わず、明日に至って、尚鎮火申さずとも、一山の寺僧は、例日通り、勤行修学を休まざることに、申合せをしたそうでござるよ」

「ではお隣りでは、町人は一切……」

「もっとも当寺とて、人数には限りがあれば、家を焼かれし人々は、更に遠くまで、歩かねばならぬ……」

そういううちにも、駒込片町の通りを、焼け出されの難民たちが、何か口々に叫びつつ、恐怖に追われて、ざわめき通る声がきこえた。そのうちの一人、二人と、円乗寺へはいってくるのであった。

小坊主がやってきて、

「お内儀さま、お七さま、風呂が沸いています」

と云うが、この騒ぎの中で、まさかのんびり湯に入るわけにもいかぬ。少し下火になるまでは、帯さえとくことは出来ないだろう……。

この美しきもの

一

お七は、いつもの本郷追分町の八百屋の二階だと思って目をさました。最初に目にはいった天井の竿ぶちが違うので、オヤッと思った。自分の部屋には、こんな漆塗の竿ぶちなどはない……。

そうだったと、漸っと昨夜からの火事の記憶が蘇った。書院の窓障子が、もう明るい。枕もとに、お丈とお杉が、火鉢の炭火で、豆を煮ている。

「お七、目がさめたの」

「あら……二人とも寝なかったの」

「火事がすっかりおさまらないのに、みんなで寝るわけにもいかないでしょう」

「まだ、燃えてるの」

「本郷や小石川は、一軒も残っちゃァいないそうだから、自然火もおさまったけれど、浅草から川向うへ飛火したのは、まだ、炎えつづけているそうだよ」

お七は床をぬけ出すと、お杉に寝みだれ髪を直してもらった。島田や兵庫に結った当時の女は、起きると口をすすぐより先に、髪を梳らねばならなかった。上流では、寝たままの形で、必ず腰元が髪をとかした。髪が出来て、それから寝巻をぬいだ。手水うがいは、そのあとだ。

「顔はどこで洗うの」

「庫裏の厨に内井戸がございます」

お杉が案内するのに蹤いてゆくと、やや広い厨があって、その土間の真ン中に、車のついた井戸がある。

長四郎が立っていた。

「お七さま。お早ようございます」

「誰だと思ったら、長さんかい。父さんは」

「はい。御無事でいらッしゃいます。今日一日、焼址の手伝いをして、明日は当寺へおいでになりましょう」

「それはよかったね。ずい分怪我人も多かろうに、八百久はみんな無事で——」

「隣りの綿屋は、番頭の藤兵衛が、大火傷で、死にそうです」

「まあ……」

お七が顔を洗う間、お杉は背ろに立って、両袖が濡れな

いように、持っててやる。それでお七の白い肘が、袖のフリから、見えている。

それぼかりではない。わざわざ乗詮和尚が貸してくれた黒漆の半挿盥にむかって、腰をかがめているお七のうしろ姿は、いかにも悩ましい線を劃く——。

土間と板の間の境の框に、男たちの目が、四つも五つも並んだ。焼け出された町家の若旦那や寺の所化たちが、思わず立止って、お七のうしろ姿に、目を奪われた恰好なのだ。それとも知らぬお七は、ゆっくり顔を洗い、うがいもして、

「おかげで、さっぱりしました」

と、会釈しながら振りむくと、大ぜいが見物しているので、忽ち真赤に顔を染めた。

「あら、いやだ……」

「お七さま、あちらへ」

これにはお杉もびっくりして、別の上り段から、お七を体で庇いつつ、もとの部屋へかけ戻る。

豆を煮ているお丈もおどろいて、

「まあ、どうしたの」

「あたし、もう二度と、厨へはいきませんよ」

お七はプリプリした。

二

「あたしが顔を洗っていると、男の人たちが見ているの」

「ホホホ」

「母さんは笑うけれど、笑いごとじゃァありませんよ。恥かしいわ。きっとあたしのお臀が大きいって、見ていたのでしょう」

「まさか」

「いいえ、そうにきまってるわ」

お杉が代って、今の様子を物語ってから、

「あんまり、お七さまがお美しいから、若旦那や所化たちが、思わず足をとめて、見ていたのでございますよ」

「そんならいいじゃないの、お七」

「よくないわ。あれでは、おちおち顔も洗えないわ。和尚さんに、抗議して下さいな」

「いつもは、顔をお洗いあそばしてから、諸肌ぬいで、襟や胸を拭いて差上げるのですが、そんなことをしたら、それこそ、隣りの吉祥寺からも見物に来ますわ」

と、お杉も面白がって、冗談を云う。

「みんなが見ているとも知らないから、もう少しで、肌をぬぐところだったの。考えてもゾッとするわ」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com